

「京都 ALS 患者囑託殺人」における岡部宏生インタビュー全文

インタビュー実施日：7月28日(月)

◆概要

全身の筋肉が動かなくなっていく神経難病の筋萎縮性側索硬化症（ALS）を発症した京都市中京区の女性、林優里さん（当時 51 歳）から頼まれ、薬物を投与して殺害したとして、警察は 7 月 23 日、囑託殺人の疑いで、呼吸器内科医の大久保愉一容疑者（42 歳・仙台市）と、医師の山本直樹容疑者（43 歳・東京都）を逮捕したと発表した。（7/23）

医師らは、2019 年 11 月 30 日夕に林さんのマンションを訪れ、室内で薬物を林さんの体内に投与し、死亡させた疑い。二人は林さんの主治医ではなく、SNS を通じて知り合ったとみられる。当時家にいたヘルパーには林さんの知人を装っていたという。

林さんは、「死ぬ権利」をネット上で訴え、安楽死を望んでいたといい、同様な投稿をしていた医師らに依頼したとみられている。事件の直前には、医師の口座に女性から現金 130 万円が振り込まれていたといい、医療行為ではなく報酬目当てだったとも府警は見ている。医師らが主治医ではなく、女性の症状が安定しており、死期が迫っていなかったとして、府警は、女性は安楽死ではないとの見方を示している。女性は、病を克服して生きたいという意味も示していたといい、気持ちが揺れていた面もあったらしい。

ALS 患者や家族らでつくる日本 ALS 協会は 7 月 27 日、「医療倫理に背く行為であり、二度とあってはならない」などと医師らを批判し、ALS 患者でもあるれいわ新選組の舩後靖彦参院議員は 23 日、「『死ぬ権利』よりも『生きる権利』を守る社会にしていくことが、何よりも大切」だとする見解を出した。

質問) 事件に対してどう感じましたか。

大変な衝撃を受けました。それは ALS の患者があのような亡くなり方をしたということと、その方法があまりに想像を越えているものだったので。

質問) 想像を越えているというのは具体的に？

安楽死という名前の囑託殺人、または自殺幫助が行われたということです。しかも患者と医師の間は SNS でつながっているのみであることと、事前に金銭が支払われていることにさらに驚きました。ここまでいくと殺人を請け負う人がいるということです。

質問) 被害女性が SNS 上で安楽死希望などの書き込みをしており、辛い思いをしていたといわれる今回の事件ですが、被害女性に対し、思うことを教えてください

二つ強く思うことがあります。一つは死にたくなる気持ちはよくわかるつもりです。私も何度も死にたくなりましたから。七年くらい前は安楽死を真剣に考えて児玉真美さんのブログでスイスに行けば死ねることを知りました。そのときに自分も死ねるのだと知ってどれほどほっとしたことか。それから具体的に誰に連れて行ってもらうか？いくら払えばよいか？まで考えたのです。でも連れて行ってもらう人は、ある程度私の介護ができないと連れて行ってもらうのは無理なのです。そうすると、その人に残る傷を考えたらとても言い出せないことがわかって、結局自分は死ねないのだと思ったものです。この患者さんはこれまで関わってくれた人のことを考えなかったのでしょうか？ひどい人かも知れないし、そうではなくて考えていたかも知れません。私は二つ目に思うのです。誰だって死にたいと思うようなときもあります。ALS のような過酷な病気だと死にたくなるのが、よくあるのは当たり前です。私も今でも辛いことがあると死にたくなるのです。生きたい気持ちと死にたい気持ちを繰り返しながら、日々を過ごしているのです。その辛いとき死にたいときに死ぬ方法を具体的に検討できたら、どんどんその気持ちを固めていってしまいます。もう生きたいという方に戻ってこなくなります。このことは、患者として一度は突き詰めて死のうと思った私の実感です。なので、この医師たちの罪深さを感じます。

質問) ALS 含めて難病・障害で苦しい思いをしていると、生きたい気持ちと死にたい気持ちが繰り返すということでしたが、そういうときにどうすべきだと思いますか。

この患者さんも自分を支えてくれている人たちもいたし、社会資源も得て 24 時間独居をしていました。そういう生活をしていたら必ず希望や、または人への感謝や関わりをしっかり感じることはあるはず。そういうことを感じられないとしたら、それは障害とか支援が必要とかという問題ではなくて、固有の問題です。林さんという人も、決してネガティブな発信だけではないです。明るい発信もあったし、人の役に立ちたいという発信もしていました。だから、さっきのことを思うのです。今いただいた質問にストレートに答えれば、人が関わることだと思います。人がどういうふうに関わるかはそれぞれですが。私の気に入っている言葉に支援は doing ばかりではなくて、being が最高なときがしばしばあるというものです。doing は具体的に何をするかということ。being はただ一緒にいることです。

質問) それは、生きたい気持ちと死にたい気持ちが繰り返してるひとに、何か支援するだけでなく、ただ一緒にいるということ、何かをするということだけではなくて、ただそこに寄り添っているだけでも、その人の生きたいように寄せることができるという、そうした理解でよろしいでしょうか。

はい。自分のそばにいてくれる人がいるなんて最高ですよ。本当は健康な人でもそうなのに。それは皆さん同じですよ？

質問) この事件が社会に与える影響について、懸念はありますか

安楽死や尊厳死を認めるべきだという議論になっていくことが恐ろしいです。

質問) 事件が安楽死・尊厳死の是非と関連して論じられ、肯定的に捉える意見もありますが、どう思いますか。恐ろしいということでしたが、安楽死・尊厳死の是非についてのご自身のご意見も教えてください。

安楽死には明確に反対です。理由は以下の通りです。人間の尊厳を守りたいと言って安楽死をしていきます。昨年 NHK で安楽死を取り上げた番組はご存知ですよ。アメリカの女性にも自分の安楽死を記録して詳細に発信した人がいました。その人達の主張は人間の尊厳を守って死にたいということです。自分でご飯が食べられないことや排泄を介助してもらうことは自分の尊厳を失うことだと言っていました。しかし、人間の尊厳は本当にそういうことでしょうか？もしそうなら私は全く尊厳を失って生きていることになります。「人間の尊厳」なんて言うからわかりにくくなってしまいます。「その人にとっての尊厳」だということなのです。その人によって尊厳は変わるということになるのです。私にとっては、身体が動かないことが尊厳を失ったことではありません。それを尊厳という言葉でくくるから事実が分からなくなってしまうのです。安楽死を選ぶことはその人が自分はこの状態なら生きていたくないということです。つまり自殺そのものです。これから社会の中で安楽死を議論するならあなたは自殺をどう思いますか？という事を明確にして欲しいです。

もっと深く考えてほしいと思います。同情なんてあまりにも浅はかです。安楽死という名の自殺なのだということをわかってほしいです。自殺を認めるなら、障害者や高齢者だけでなく、誰もが死にたくなったら死ねるようにしたらよいのに。そこで特別な人にだけ認めるから優生思想と結びついてしまう。コロナのことをみてほしい。トリアージなんて言ってる場合でない。いつだって重症になったら、自分が差別される側になるということです。優生だと思ってた人がたちまち差別される側。そういうわかりやすい例を社会で考えてほしい。安楽死を安易に認めることは、自分や家族や友人を追い詰める可能性があるということまで考えて、賛否を言ってほしい。

質問) あえておききするんですけど、誰もが死にたくなったら死ねる社会になったらいいと

いうわけではないですよ。冗談だと思いますが、文字にすると勘違いしやすいので念のため。

はい、そうです。もちろんそういう社会にはなってほしくないです。

質問) 特別な人だけ認めてしまうから優生思想に結びついてしまう、だからいけないんだというお話ですが、そのところをご説明いただいてもよろしいでしょうか。

障害者や難病患者や高齢者などの社会の支援を必要とするような人たちだけに、尊厳死などを認めるから、優生思想に繋がってしまう。

質問) つまり今回の件で言えば、林さんが難病で苦しい思いをしていただろうから、そういう死に方を認めていいんじゃないか、という考え方は優生思想につながってしまう、という考え方でいいですか？

はい。もっと言うと今回の林さんは誰から見ても気の毒だという人が圧倒的に多いけど、実はどういう人が気の毒かということが差別なのです。命に違いがあって、生きる価値のある者とそうでない者があるなんてことは勘違いなのに。そういうことはないのに、まるで価値のある命と価値のない命があると錯覚してしまう。もしも、こんなこと言ったらなんだけど、世界の名経営者のカルロス・ゴーンより私の命のほうがよっぽどマシでない？と、そういうことはないのに、無理矢理言うと、こういうことになります。半分冗談ですけど。

質問) 障害者への差別や周囲への負担ということとは別に、純粹に自分の生き方として「こういう状態になったら人生に終いをつけたい」と考える人もいると思います。「生き方・死に方を自分で決める権利があるはずだ」と主張する人に対して、どう答えますか？

死にたいというときがあるのは、じゅうぶんわかります。でも、死ぬということは人間の権利なのではないかと問いたい。人間以外自殺はしません。では人間らしさの証拠として、生きること死ぬことを自由にしてよいのか？その権利を認めるべきだということになるのか？そうではないと思います。だって人は、人の構成している社会の中で生きている。それなのに死ぬことを自分で決められるわけないと思う。それがどんな影響を及ぼすかについて考えずに死ぬ権利を持たせろというのは、それまでに社会で生きていたことに対する裏切りです。よくそういう勝手なことを言える。でも、そういう私も死にたいと言うのだから、本当に難しい。だからこそ、深く考えないとです。

質問) 裏切りというのは？それは具体的にどんな影響を及ぼすと思いますか。

裏切りというのを別の言葉でいうと、命は自分だけのものではないということ。まして、自分の死を選択できるようにしてということは、他人の死も認めることに直結してしまうということ。それが社会の仕組みというものです。

質問) 自分の死を選択できるようにするということは他人の死も認めてしまう、それがなぜいけないのか補足していただけますか。

わかりにくいですが、生物は生きることが基本です。生きることが前提で存在しています。それを、自分も含めて、他人を脅かすようなことはあってはならないと思います。「生命の尊厳」です。「人間の尊厳」なんて尊大だと思っていますが、「生命の尊厳」というなら大賛成です。

質問) 死ぬ権利を持つということに岡部さんは反対されているんだと理解しました。そういう岡部さんでも死にたいと思うのだから難しい、というのはどういうことでしょうか？

人の持っている多面性ではないでしょうか？多面性とは言っても、それさえ変化します。その時々環境や置かれた状態によって、表出してくるものが、他人に見えてくるのだと思います。それなので、その時々で振り回されてはいけないことがあるのではないのでしょうか？私も「死にたくなったら死んでもよい」と思ったらいけないのではないかと思うのです。そうしたら今ここに居る人たち（介護者・支援者・社員ら）に裏切り者と言われるでしょう。林さんもですが、死にたくなっても、あんな死に方をしてはいけないのです。これは理屈を越えた「生きる」ということそのものなのだと思います。だからいくら理論で考えても、難しいのだと思います。

質問) 今回の事件に対して、私たちが作っているこの社会が、今回の事件についてどう考えて、どう向き合っていけばよいと思われませんか？

この事件をきっかけにして、安楽死や尊厳死について、むやみに賛否を言わないことを求めたい。優生思想ってなんだろう？ということと、誰もが有しているであろう「内なる優生思想」にまで言及して議論がなされることを強く希望します。反面で、そこまで希望するのは現実的でないかも知れない。もしそうであったなら、この機会にネットの恐ろしさの一面と、人が生きるということを何をもっていうのか、について考えてほしいということを発信していきたい。普段は、障害者の発信は特別な人たちの言うことだと思われている。今回も障害者団体などからコメントが発信されているが、特別な人たちの発信だと思われてしまう。それを普通の人たちの中で、普通に考えるべき問題なんだということになってほしい。

今の私は恐らく日本でも有数な介護者に囲まれて暮らしています。それでも週に三回はコミュニケーションが難しい介護者に介護を任せています。そのときは何時間も舌を噛んだままに涎を流して過ごしています。そんなときには生きていたくなくなる時もあります。でも、いつもの介護者がきてくれた途端に、心も体も生き返ります。簡単に「生きようよ。」なんて言えません。でも誰かが関わってくれることで、生きる希望が湧くのです。私たちに関わってくれている皆さんがそうなのです。